



九 麦茶の洪水

「大王。麦茶が流れてきました」

「しかも冷たい麦茶です」

「よし。チャンスだ。固体班は急いで壁を作って、麦茶の波がおでん三兄弟にぶつけるようにしろ」

「アイアイサー」

麦茶の波は一番下の三男のだいこんを包み込んだ。おかげで、だいこんから湯気が消えた。

「よし。いまだ。だいこんをこなごなにしろ」大王が叫んだ。固体班の隊員たちはスコップやつるはしを持って、だいこんに飛びかかった。

「兄弟」

「大丈夫か」

長男のこんにゃくと二男のたまごが、三男のだいこんに声を掛ける。

「大丈夫だよ。兄貴たち。冷えても力は変わらないから。俺たちの本当の力をこいつらに見せてやろう」

固体班が冷えただいこんを中心に、おでん三兄弟に飛び掛かる。だが、おでん三兄弟の体に跳ね返された。

「どうだ」

「俺たちの体は」

「ゴムみたいだろう」

折角、温度が下がりチャンスになったものの、おでん三兄弟の体がスコップやつるはしを跳ね返すので、消化ができない。

「うーん。主が食べ物を飲みこまずに、よく噛んでくれたら、こんなことにはならなかったのになあ」大王は再び、腕組をして頭をひねるばかりだ。それでも、固体班の隊員たちは、おでん三兄弟の体に果敢に飛び掛かる、だが、それでも跳ね返されるばかりだった。

「いつまで」

「同じこと繰り返すつもりだ」

「もっと頭を使え」

「はっ」

「はっ」

「はっ」

おでん三兄弟の高笑いがお腹の中で乱こだましている。

「これで、もう大丈夫だろう。でも、なんだか喉が渴いたぞ」

僕はグラスに並々と麦茶を注いだ。

「ええ、まだ飲むの？もう十分じゃないの」

王子が止めようとしたけどもう遅かった。グラスの底は元の透明に戻った

「大王。また、麦茶の洪水が押し寄せてきます」

「何だと。主はまた麦茶を飲んだのか。いや、これはチャンスだぞ。固体班。急いで、壁を作れ」

「駄目です。もう間に合いません。ああああ」

固体班の隊員たちは麦茶の波に飲み込まれた。と、同時に、おでん三兄弟も麦茶の波に飲み込まれた。

「ああ」

「これは」

「どうしたことだ」

おでん三兄弟は、麦茶の津波の力で、こんにゃく、たまご、だいこんとバラバラに砕けた。

「今だ。消化蓋を開けろ」

「細かく砕かずに消化管に流すのですか」

「今回は仕方がない。主には、よく噛んで食べるように注意する」

「アイアイサー」

消化蓋が開けられ、おでん三兄弟はばらばらになって流されていった。

「ああ」

「せっかく」

「もっと暴れてやろうと思ったのに」

「もう少し」

「三人で」

「いたかったなあ」

おでん三兄弟の声が消化管の中の遠くに消えていった。だが、お腹の中はまだ、麦茶の洪水のまままだ。

「私たちが何とかします」

リキッド班の隊長をはじめ、隊員たちが果敢にも、ホースで麦茶の波を吸い込もうとする。

「駄目です。勢いが強すぎます。あーあ」

リキッド班の隊員たちも、麦茶の波に飲み込まれてしまった。

「このままではいかん」

大王が動いた。大きく息を吸い込むと、体が何倍にも膨れ上がった。麦茶の津波に立ち向かう。津波は大王に当たり、勢いがやや弱くなった。

「いまだ」

大王はリキッド班のホースを持つと麦茶に向けた。

「どくどくどくどく」

ホースに麦茶がどんどんと吸い込まれていく。と同時に、麦茶の津波に飲み込まれた隊員たちの体が床から現れてきた。

「大王。ありがとうございます」

「おかげで助かりました」

「すぐに残りの麦茶を吸収します」

隊員たちは次々と立ちあがると傍らに落ちているホースを掴んだ。

「お前たち。大丈夫か。ふう。何とか、収まったか。だが、まだ油断するな。とりあえず、麦茶を吸収してくれ。やっぱり、麦茶だな」

大王は顔に浴びた麦茶をペロッと舐めた。

「アイアイサー」

隊員たちは全員で麦茶にホースを向けた。

「おっ、元に戻ったかなあ」

僕は再度、おなかを触る。

「そんなに慌てなくてもいいよ。熱いものは冷ましてから、ゆっくりと食べてくれよ。それと、熱いからといって、何杯もお茶を飲まない方がいいよ。消化が悪くなるからね」

王子が注意をする。

「わかっているよ」

「何、ひとり言、つぶやいているの」

僕が王子とやりとりしていると、ママが話し掛けてきた。

「いや、こんにゃくやたまご、だいこんが熱くてやけどしそうだったんだよ」

「そんなに慌てなくてもいいのよ。ゆっくり食べなさい」

ママもおしっこ王子と同じことを言う。

「わかっているよ」同じ返事をする。

僕は、その後、すじ肉、とうふ、はんぺん、じゃがいも、こんぶも食べた。あんまり美味しかったので、もう一度、こんにゃく、たまご、とうふ、だいこん、すじ肉、とうふ、はんぺん、じゃがいも、こんぶを食べた。最後に、お茶づけで夕食を締めた。

「ふう。お腹いっぱいだ」

「ちょっと食べすぎじゃないかな」王子が渋い顔をする。

「だって、美味しかったんだ」

「でも、お腹が大きく突き出ているよ」王子がポケットから顔を出してお腹を覗いている。

「食べることは、君の成長にもつながるし、僕らが働くためにも必要だけど、食べすぎると食べ物を消化できなくて、そのまま流してしまうし、僕らもてんでこまいで疲れ果ててしまうんだよ。結果的に体にも悪いんだよ」

「そう」王子の心配をよそに、僕はふくらんだお腹を満足そうに撫でた。